

目 次

1. 男女共同参画企画 開催趣旨

2. 男女共同参画企画 開催報告

2-1. 概要と成果

2-2. ランチョンワークショップ プログラム要旨

2-3. ランチョンワークショップ 開催時の記録

2-4. 会場アンケート集計結果のまとめ

2-5. 開催終了後に頂いたコメント

- 1) 末岡多美子先生から頂いた(3月5日)メール (抜粋)
- 2) 菅裕明先生から頂いた URL リンク情報及びご著書

3. その他資料

3-1. ポスター参加機関一覧

3-2. 省庁への事前案内状

3-3. アンケート集計データ

3-4. 関連リンク

1. 男女共同参画企画 開催趣旨

「男女共同参画事業」が時代の追い風に乗ってさまざまな取り組みがなされるなか、各学協会においても相互に連携し、それぞれ特色ある施策を議論しつつある。分子生物学会・生化学会においても、6年以上にわたり、「キャリア形成と子育て」あるいは「PI になるには」といった問題をとりあげつつ、現状調査に基づく問題提起や啓発活動などを続けてきた。

本企画では、特に大学・研究所など「アカデミアにおけるキャリア形成およびポジション獲得」に焦点を絞り、成功例として代表的なスピーカーをお招きした。第1部は5名の先生方のご講演、第2部はパネルディスカッションから成るが、多様なキャリアパスを男女共に再考する機会として、今後の男女共同参画のあり方を議論するとともに、参加者には明るい未来への希望を抱いてもらう場としたい。

なお、12月11日-14日の間に、文部科学省・女性研究者支援モデル育成事業採択20機関(平成18・19年度)および公私の助成機関・財団による関連するポスター展示も実施する(ポスター展示会場:展示ホール1階、ディスカッション・コアタイムとして12日14:00~14:30を予定)。

2. 男女共同参画企画 開催報告

【世話人:BMB2007 男女共同参画 WG】

日本分子生物学会男女共同参画委員会 ~大隅典子(東北大)、本間美和子(福島医大)

日本生化学会男女共同参画推進委員会 ~北爪しのぶ(理研)、後藤由季子(東京大)

【事務局】

日本分子生物学会 事務局 みゆみ 陽 智絵

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-5 20 山京ビル 11 階

TEL. 03-3556-9600 FAX. 03-3556-9611 E-mail: info@mbsj.jp

2-1. 概要と成果

【開催の概要】

昨年12月11日(火)~15日(土)に横浜にて開催されたBMB2007において、男女共同参画企画によるランチョンワークショップの開催(12月12日)、ならびに文部科学省・女性研究者支援モデル事業採択機関を含む25機関によるポスター展示とポスター・ディスカッションを行った。講演タイトルを含む開催概要を下記に記すが、プログラム詳細は2-2. 参照。

I. 男女共同参画ランチョンワークショップ「アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ」

日時:12月12日(水)12:15~13:15

会場:パシフィコ横浜 会議センター3階 303

第 1 部 「アカデミアにおけるキャリアパス形成の課題」(12:15～12:55)

- 1)メンター制度についてアメリカに学ぶ(菅裕明／東京大)
- 2)アカデミアにおけるキャリアパス支援の取組み(有賀早苗／北海道大)
- 3)アカデミアにおける環境整備(小林和人／福島医科大)
- 4)子育てと共に研究者人生を謳歌する(北爪しのぶ／理研)
- 5)理想的な女性研究者像(高橋淑子／奈良先端科学技術大学院大)

第 2 部 パネルディスカッション「研究者人生を楽しむには」(12:55～13:15)

- 1)パネリストとして、第 1 部スピーカーの他、末岡多美子先生(前・コロラド大学教授、「波濤を越えて」著者)のご出席を頂いた。

II. 文部科学省・女性研究者支援モデル育成事業採択機関等による ポスター展示

日時:12 月 11 日(火)10:00～14 日(金)18:00

(ディスカッション・コアタイム 12 日 14:00～14:30)

会場:パシフィコ横浜 展示ホール 1 階

ランチョンワークショップは、副題「アカデミアにおいて研究者人生を楽しむ」が示すように、参加者には明るい未来への希望を抱いてもらう場としたい、という企画趣旨のもと、大学・研究所など「アカデミアにおけるキャリア形成およびポジション獲得」に焦点を絞り、成功例として代表的なパネリストをお招きした。第 1 部は 5 名の先生方のご講演、第 2 部ではパネルディスカッションを行い、多様なキャリアパスをどう実現したら良いか、男女共に再考する機会と成るよう企画した。

ランチョンワークショップ当日には、事前の年会 HP による案内も功を奏して定員 200 名をはるかに超える 300 名程の参加者が集まり、熱気あふれる盛会となった。第 1 部では、各講演者が 7 分という短時間プレゼンの中に創意工夫を凝らして聴衆を引き付け、それぞれの演題に即した経験に基づく強烈な応援メッセージを送っていただいた。第 2 部パネルディスカッションでは、論点としては以下の 3 点、①自分の理想とする研究者人生を歩むためには、②アカデミアにおけるその実現に壁となるもの、③アカデミアにおける「成功」とは、を意識して活発なディスカッションが進められた。質疑の場面では、所属機関での取り組みを開始したい参加者からの具体的な質問もみられた。大隅典子委員長によるスムーズな司会進行により盛況のうち時間通りに閉会することが出来、終了後も話題冷めやらぬ、の感があった。

会場アンケートの結果から、20～30 代の男女を含む若い大学院生・ポスドクの参加が多く、「何となく将来が不安」という参加動機も挙げられていたが、「共感した」、「エネルギーをもらった」、「何かできることから力を併せようと思った」など、良好な感想が大半であった。特に今回の男性パネリストの姿を見て、「女性サイドから働きかけるだけではないことを教えられた」という感想も見られ、今後の男女共同参画あり方についても再考していただける場にもなったのではないかと、企画委員一同自負している。

また、別会場のポスター展示に於いては、案内状を送付した 25 機関全てから参加を頂くこ

とが出来た。今回初めての試みとしてコアタイムを設定した「ポスター・ディスカッション」開催時には、時間を越えて活発な議論を行う参加者の姿が多く見られた。

【今後の企画について】

ランチョンワークショップ終了後に回収されたアンケートを一覧したところ、今後は下記の内容を充実させることが重要であるとの結論に達した。

I. 学会員への情報の紹介

- 1) 制度: 現状での制度、労働条件に関する法令、等。
- 2) 便利情報: 利用可能な保育施設、病児保育サポート体制、育休中など在宅時に利用できる情報の紹介(文献検索を含む)、(高齢者等)在宅施設等、現在進行形の情報。

II. ネットワークづくりなど共同参画に関する有益な取り組みの紹介

- 1) 男女共同参画に関する好ましい実例(アカデミアと企業の双方)。
- 2) NPO サイト等ボトムアップによる取り組みの紹介(例:子育て支援 NPO 組織)。

上記の結果をふまえ、次年度の合同年会における企画開催計画もすでに検討を始めている。早速、次年度の構成として以下の案がまとまった。より広い会場を準備するなど、今回の参加者からの意見を反映する企画となるよう、細かい内容については今後さらに詰めていく。

開催時間帯としては、学会 2 または 3 日目にお弁当付きのランチョン企画とする。12:00~13:30 などの 90 分程度が適当と考えられ、十分な広さがある、次のセッションまでの時間が空いている等、開催場所を考慮する。企画構成案としては、以下の 3 部を予定する。

I. 第 1 部(基調講演) 30 分, 15 分 x 2 名

- 1) 制度等の紹介(講演者として省庁関係者)。
- 2) 大規模アンケート結果の分析報告、現状と今後について(企画委員)。

II. 第 2 部(現場の声) 30 分, 10 分 x 3 名

III. 第 3 部(パネルディスカッション) 30 分

第 2,3 部では、企業(製薬など)の方、アカデミアの方など、生の声を聞かせてくださる 3 名の適任者を選ぶこととする。

最後に、本年度のランチョンワークショップ開催にあたりご協力いただいた全ての方々に心から感謝を申し上げますと共に、次年度の開催へのご教示も賜りたくお願い申し上げます。

(2008 年 1 月 18 日、文責:本間美和子)

2-2. ランチョンワークショップ プログラム要旨

総合司会:大隅典子(東北大)

第1部「アカデミアにおけるキャリアパス形成の課題」(12:15~12:55)

1) メンター制度についてアメリカに学ぶ(菅裕明/東京大)

学生やポストクのメンタリングは、PI として教員もしくはシニア研究員に課せられた重要な使命の一つである。これは、日本ばかりでなく、アメリカでも同様だ。私の講演では、F32 と呼ばれる NIH の fellowship を取り上げ、その申請と審査がどのように行われているかを解説し、アメリカでのメンター制度について垣間見てもらおう。

2) アカデミアにおけるキャリアパス支援の取組み(有賀早苗/北海道大)

女性に限らず科学技術分野の研究者は一般に、キャリア開発・キャリア展開について鈍感なように思えます。自分のやりたいこと、自分の持つスキルに加えて、社会のニーズを把握・認識し、自分を活かす場を多様な選択肢の中から見つけられるような教育プログラムが必要だと考えます。何となくアカデミアに固執してしまう要因として、学生やPDがアカデミア外に向かうことをプロモーションではなくドロップアウトと捉えがちな大学教員の意識も問題です。北大では女性研究者支援モデル育成事業と科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業、さらに若手研究者の自立的環境整備促進事業(テニュアトラック導入)など、複数の人材育成プログラムが連携して学生およびPDのキャリアパス支援に取り組んでいますので、女性の問題を軸に現状をお話したいと思います。

3) アカデミアにおける環境整備(小林和人/福島県立医科大)

男女共同参画の場として研究を取り巻く環境を考えた場合、各機関における施設・設備、組織体制、人員など、研究に直結する要因は当然重要ですが、それと共に、研究者の活動を間接的に支える支援体制も大切な要因であると思います。そのひとつに子育ての支援があります。子育てについては、母親は当然大きな役割を持っていますが、父親にも様々な役割があり、男女を問わず、充実した子育て支援体制の確立が望まれます。最近、私どもの大学においても、大学附属の託児所をめぐって、さまざまな改革が行われてきました。本セミナーでは、研究支援に関する環境整備のひとつとして、大学の託児所の問題を取り上げてみたいと思います。

4) 子育てと共に研究者人生を謳歌する(北爪しのぶ/理研)

私は理化学研究所に約10年間勤務している間に息子二人を出産し、研究と育児を楽しんでいる毎日です。最近、女子大学院生から、「子育てしながら研究できるのですか?」と聞かれることが度々ありました。日本では、大学院において女子学生の占める割合に対して、大学スタッフにおいて女性の占める割合が極端に低いため、女子学生にとってのロールモデルが不在となっているのではないかと危惧します。研究を続けながらも子育ては手を抜きつつ、結構何とか両立出来るもの、と自分のつたない経験がお役に立てればと思い、本セミナー講演をお引き受けしました。

5) 理想的な女性研究者像(高橋淑子/奈良先端科学技術大学院大)

どの道においても、そして男女を問わず、いわゆる「成功」している人は、困難な道を究めるべく歯を食いしばってきておられますが、多くの方はそんな苦労話は他人にはいわないものです。ですから、「ロールモデル」と一口に言っても、その本当の意味はなかなか難しいものがあると思います。そもそもロールモデルは必要なのでしょうか？ところで、日本の女性が本当に苦しんでいるのは、我が国独特の「ノイズ」ではないかと思います。ノイズからどのようにして自己解放するのか、ご一緒に考えることができればよいと思います。

第2部 パネルディスカッション「研究者人生を楽しむには」(12:55～13:15)

第1部のスピーカーを交え、以下の論点を中心に、アカデミアにおける多様なキャリアパス形成とそのハッピーな実現について考察する。パネリストとして、前コロラド大学教授・末岡多美子先生(「波濤を越えて」著者)のご出席を予定している。

- 1) 自分の理想とする研究者人生を歩むためには
- 2) アカデミアにおけるその実現に壁となるもの
- 3) アカデミアにおける「成功」とは

2-3. ランチョンワークショップ開催時の記録

第1部 「アカデミアにおけるキャリアパス形成の課題」(12:15～12:55)

- 1) メンター制度についてアメリカに学ぶ(菅裕明/東京大)

学生やポスドク、研究者を育てること(メンタリング)はPIにとって重要な仕事のひとつであり、使命となっている。しかし、PIは研究者・学生が持っている能力を見極めたうえで、将来活躍できる場がどこか、ということを見極めさせる・認識させることが課題となる。

メンター制度と同様の制度は日本にはないが、今回はアメリカでのメンター制度を垣間見てもらいたい。アメリカ NIH の fellow ship には申請書 F32 というものがあり、アメリカ人がグリーンカードを持っている人に限られる(現在この申請書はすでに廃止となり、他の方法での申請・審査が行われている)。通常の申請書提出の際に必要なデータに加えて、学位や成績などが必須項目となる。さらには、研究計画を 10 ページ作成し、スポンサーを自ら見つけて話し合っておく必要があり、推薦状も必要である。また、人材育成のために、他の大学・研究機関で研究する必要がある。アメリカではポスドクは労働力ではなく、一人前の研究者になるためのステップアップという認識となっている。

メンター制度は非常に大変なことで、必ずしもうまくいくというものではないが、プレゼンテーションなどで学生たちが自分自身で教育するといったシステムをとり入れることになる。こういったシステムがメンター制度としての重要な価値をなすのではないかと考えている。

- 2) アカデミアにおけるキャリアパス支援の取り組み(有賀早苗/北海道大)

北大では女性研究者の増員を目指し、目標を全教員の 20%としている。残念ながら、現在の教員の女性比率は 8%で教員以外はすでに 20%を超えている。また、ポスドクは増え

ているが、教員数は減っている現状の厳しさを考えなければならない。こういった状況の中で、女性比率を上げるためには、教員として女性を採用するときの漠然とした懸念を取り除く必要があり、それは同時に出産や育児・介護などへの選択を充実させることにあり、その選択の不利益を解消できる環境を整えることにつながってくる。この環境整備は、本人のキャリアパスの向上に対してだけでなく、所属するチーム・ラボへの配慮という観点からも必要だと考えられる。昨年度、女性研究者支援モデル育成事業に採択されたことによって、環境整備の確立はまだまだではあるが、北大では出産ラッシュとなっている。

現在北大では、女性研究者支援モデル育成事業、科学技術関係人材のキャリアパス多様化促進事業、さらに若手研究者の自立的環境整備促進事業(テニュアトラック導入)など、複数の人材育成プログラムが連携して学生及び PD のキャリアパス支援に取り組んでおり、総合的な人材育成事業のなかで、女性への支援も考えていかなければいけない。博士課程を修了した後にはいろいろな職種について検討する際に、こういったアカデミア外に向かうことをドロップアウトと捉えがちな PI のネガティブな意識も問題である。研究の合間の就職活動が難しいなどといった背景から、なんとなくアカデミアに残ることになってしまっていて、自分のキャリアと客観的に向き合うことができなくなっている。何がしたいか、何ができるか、何を期待されているかということを考え、気持ちと能力をまとめて、大まかにでも優先順位をつけていく必要があるのではないだろうか。

その結果は人により千差万別になるが、プロ意識をもって生き生きと自己実現できるような環境にすべく北大では努力しているところである。

3) アカデミアにおける環境整備(小林和人／福島県立医科大)

男女共同参画の場として研究を取り巻く環境を考えた場合、各機関における施設・設備、組織体制、人員など、研究に直結する要因は当然重要だが、それと共に、研究者の活動を間接的に支える支援体制も大切な要因であると思われる。そのひとつである子育ての支援については、男女問わず充実した体制の確立が望まれている。今回は、福島県立医科大学の附属託児所を事例として話をしていきたい。

共働きのため民間の保育所に預けようとしたところ、妻が常勤ではなかったために、入所の優先順位が後になり預けることができなかった。また大学の託児所については、病院勤務の看護師・医療技師の子供だけを対象としていたため、教員の子供は預けることができなかった。このため、学内の女性医師・教員から、託児所の規定を変えるような動きを起こすことによって、改善の方向へ向かっていった。現在では、派遣・非常勤・学生を問わず利用することができ、0歳児から預けることが可能で、24 時間体制で運営、病後の子供の預かりも行われている。始まって数年ではあるが、女性が働きやすい環境が整いつつあり、ひいては男性が働きやすくなるのではないかと考えている。

今回は自分の所属する大学についてはあったが、各機関においても問題提起をする事で改善ができる事例として参考になればよいと思い、紹介をさせていただいた。

4) 子育てと共に研究者人生を謳歌する(北爪しのぶ／理研)

最近、女子大学院生から「子育てしながら研究できるのですか？」と聞かれることが度々あ

ったので、本講演を引き受けた。

- ①私にとってのロールモデル
- ②結婚の影響???
- ③最大の難所?! 出産のタイミング
- ④上司と夫の理解は、どちらが重要?
- ⑤きっと楽になっていくはずの育児と研究

理化学研究所において妊娠・出産を難しくしているのは、ほとんどの研究室に期限があることで、期限途中で離職されると運営する側からすれば戦力が減ってしまうことになり、女性の雇用を躊躇するのは仕方が無いことではあると考えられる。しかしながら、理研独自の基礎科学特別研究員制度というものがあり、理研を研究実施場所として、自ら理研において研究評価を設定し、受入れ研究室の所属長から研究の任務を遂行するための支援を求めることができる。自身はこの制度を利用することにより、出産・育児に取り組むことができた。また、所属上司の理解も大きいものがあつた。理研内にも保育所が設置されており、比較的遅い時間まで預かってくれることで、実験が延びることなども対応できるようになってきている。

研究を続けながら、適度に子育ても手抜きをして両立をしている自分を見て、若い研究職の方々の参考になればと思っている。

5) 理想的な女性研究者像(高橋淑子/奈良先端科学技術大学院大)

このタイトルは難しいので、「あなたにもできる!」としてお話をし、今回の話を、サイエンスの道を進む方たちへのメッセージとしたい。

どの道においても、そして男女を問わず、いわゆる「成功」している人は、困難な道を極めるべく歯を食いしばってきておられるが、多くの方はそんな苦労話は他人には言わないものである。フランスへの留学時代の恩師は非常に厳しい先生であつたが、「他の人ができないことをやる」ということを学ぶことができた。

しかしながら、若干女性研究者をとりまくノイズが多いように見られる。海外でもノイズはあつたが、数年ぶりに帰国した日本では、「女性はいらん」といわれていた以前とは異なり「女性募集」をしているにも関わらず、ノイズが減っているようには見受けられない。このようなことを恩師にどのように考えているか伺うと、「Ignore! (無視!)」という答えであつた。また、日本の恩師に伺うと静かに「あなたは何が面白いと思いますか?」「あなたは何がしたいですか?」という答えが返ってくる。周りがなんといおうと、「自分が学問をする」ことに集中することが大切なのではないだろうか。学問は、硬いスルメのようなものであるで、今苦しくても、かみ続けていれば味が出てきて美味しくなってくるものであるということを心に留めて、進んでほしい。

第2部 パネルディスカッション「研究者人生を楽しむには」(12:55~13:15)

パネリストとして、第1部講演者に加え、末岡多美子先生(前コロラド大学教授・「波濤を越えて」著者)をお迎えした。

大隅: 本日は「研究者人生を楽しむ」ということで様々なトピックスがあると思いますが、第1

部に引き続き講演者の方々に加えて、元コロラド大学教授の末岡多美子先生(「波濤を越えて」著者)にもご参加いただいて、第 2 部のパネルディスカッションをはじめたいと思います。

末岡:末岡と申します。日本の詳細は存じ上げませんが、アメリカで感じてきたことをお話ししたいと思います。アメリカと日本の大学や研究機関のシステムを比べると、アメリカは非常に柔軟な対応となっています。例えば、女性教員が教授会に子供を連れてくるのが可能で、周りの人も何もいわず、会合の席に子供がいることが自然な風景となっています。大学構内も走り回っているが、周囲に迷惑をかけなければ良いというスタンスが基盤にあります。また、女性同士でテニユアなどに関しては、知恵を出し合って助け合うことを大切にしています。

大隅:それではフロアのほうで、ご質問を考えておいてください。先ほどの末岡先生のアメリカでの現状について、アメリカの長かった菅先生は何か追加などございますか？

菅:そうですね。あちらは、人のことをあまり気にせず、我々(自分)に大きな影響が無ければ問題ない、という考え方が定着しているのではないかと思います。

大隅:ありがとうございます。それでは、ご質問はありますか？・・・もう少し考えておいてくださいね。では高橋先生、先ほどお話されていた「ノイズ」の具体的なものは何でしょうか？

高橋:この講演の前に、若い女性研究者の問題というのがはっきりとわからなかったので、周囲に聞いてみたら、「家族・親族」という声がありましたね。後は日本の文化かも知れませんが、何でも「自分のせい」としてしまうことでしょうか。「あなたのせいよ」と言って、いかにノイズに打ち勝つか、ということが大事だと思います。

大隅:ありがとうございます。

会場:先生方のお話では、制度の改革をしないと女性研究者が育たないということでしたが、現在、産業技術総合研究所で保育所制度の改革を試みています。保育所はあるのですが、常設ではないため、非常に使いづらい状態になっていますが、個人的な着手では、そのために研究をとめるわけにも行かず、手がでないのが現状です。こうなってくると、国全体を変える必要があると思いますが、どのような手段が考えられるのでしょうか？

有賀:実際のところ、保育所は自治体ごとに扱いが違ったり、また文科省扱いか厚労省扱いかではっきりしないと思います。しかし、だいたい働きかけを続けることで、少し期待している状態になっていると思います。

大隅:実際、文科省採択の20機関モデルからのアプローチや、先日実施した大規模なアンケートをいかしたり、所属機関の女性支援室へ相談・投書するなどといったことも必要かと思います。待っているだけでは変わらないので、周囲のサポーターや応援してくれる方を巻き込んで、行動する必要はありますね。

北爪:理研について言えば、理研に所属する研究者たちのアピールで、保育所が設置されることになりましたので、頑張って働きかけていってください。

会場:研究者を支援する立場のものですが、学会のような集まりで研究者同士が話し合うこ

とも必要ですが、もっと大きく地域の市民の方々を巻き込んだ動きにしていく必要があるのではないのでしょうか？

大隅:確かにそのとおりですね。研究費には税金が使われていますから、その理解を深めていただくという意味でも、地域の方との協力は必要かと思われます。小林先生、何か改革や改善についてご意見はございますか？

小林:自分の大学の女性支援が一番遅れていると思い込んでいましたが、そうでないことに非常に驚いています。私の所属機関は病院があることもあって、女性研究者の問題はわかりやすい問題ではありましたが、最初のうちは何も聞いてもらえないこともありました。しかし、理解してくれる方は多いので、ぜひ頑張っていたきたいと思います。

大隅:ありがとうございました。他にフロアからございますか？

会場:現在の研究者を取り巻く環境は厳しくなっていますが、PI から研究は「楽しい」ということを伝えることが大事だと感じました。今回のような取り組みは、ぜひ続けていって欲しいと思います。

大隅:ここにはノイズになるような人は参加していないと思いますが、皆様にはぜひ、鈍感力を養って、研究者人生を楽しんでいただきたいと思います。本日は多くの方々にお集まりいただき、本当にありがとうございました。

以上

(文責 本間美和子)

2-4. 会場アンケート集計結果のまとめ

【当日の参加者】

男女比	男性:女性 1:2
年齢構成	10代から70代まで。20-30代が参加者の80%を占めた。
所属	学生・院生を含む大学関係者が合計70%、ポスドク5%、企業14%

【参加動機】

既に参加者の多くは、男女共同参画における女性研究者としてのキャリア構築・ポジション獲得は切実な問題であるという意識を保持しており、「大学と社会はこの問題をどう捉え、どのように考えているのか」という興味と並んで、「将来への不安」、が最大の参加動機である。参加者の8割が20～30代であることから、具体的には「進路の選択」、「結婚・妊娠・出産への迷い」、「周囲にロールモデルたる女性がない不安」が大きな理由となっており、その解消策として、「社会制度や大学の取り組み」、あるいは「卒後進路(結婚を含む)の選択肢」に関する情報を期待しての参加が多い。また、大学関係者の中には、大学での支援整備に関する立場から女性の活用についての情報収集、あるいは自分自身のキャリア形成という立場からの興味、また、このように厳しい現実の中でも「研究者人生を楽しむ」というタイトル

に惹かれて、このような理想がかなうのだろうか、という期待に基づく参加理由も見受けられた。

【参加後の感想】

ワークショップ参加後の感想としては、「自分も頑張ろうと思った」、「参考になった」、「勇気もらった」、「問題の現状や取り組みが理解できた」等、本企画についてポジティブな意見が9割を超えた。一方、半数以上の方から講演時間が短い(57%)、会場が狭い(4%)という不満や、テーマと内容について改善を求める要望も3割あった。興味深いのは、女性参加者の多くが講演者に共感しながら聞いたと言う肯定的な感想が多いのに反し、40代以降の男性参加者の中には批判的な感想も多く、「ワークショップの目的が不明」、「意味があるのか」、「取り組みの成果が伝わらない」、「議論の内容が深まっていない」、などのご意見が寄せられた。

「強い意志が必要」、「研究者人生をどう進むか」という個人の意識の問題にとどまらず、「社会全体として子育てを支援する意識改革が必要」という意見に代表されるように、支援体制を整えるだけでなく、研究室主宰者を含む周囲の理解を促す意識改革にまで及ぶ施策が求められている、という現実的な課題も浮上している。今回のワークショップでも、「ノイズ(周囲からの雑音)」がキーワードのひとつとなった。

また、「関連するポータルウェブサイトの情報がほしい」という感想が寄せられたように、自分自身の現実問題として対処するべき時に、必要な情報を適宜収集して、相談・支援を求める相手を素早く見つけて対応することは重要である。これらの情報提供については、学協会やJSTなど複数の組織が連携して効率よく行いつつあるが、情報を求める側がアクセスし易い工夫、さらに、物理的な支援だけではなく、「励まされた」という多くの感想にあるようなメンタル面での支援も念頭に置く必要があるようだ。いつでも相談に行ける場、話を聞いてくれる相手の存在、が個々人の職場環境において整備されることは重要である。

【今後の企画に対する意見】

今後取り上げてほしい・聞いてみたいトピックについては、「具体的な施策と支援の効果」、「支援を受けている側の意見」、「対立する側の意見」、「大学採用者(管理職)側の率直な意見」、「大学院在学中の出産・育児(男性を含む)の具体例」、「研究を中断した研究者の話」、「学会企画として専門分野との関連性」、「大学における教育」、「PI 女性比率を上げるには」、「多様なロールモデル」、さらに「子育てだけではなく親介護支援」、「大学院生向け説明会」、「PhD 修得後の職種」、などの意見が寄せられた。

【学会の中での本ワークショップ開催から抽出される課題点】

・特に20～30代は、公私共に重要な選択をせざるを得ない局面において、誰もが抱く漠然とした不安に加えて、我が国における制度的な支援体制と周囲から得られる「支援への問題意識」を抱えている。

- これら支援に関する制度的な情報を正しく共有できるよう、関連機関が積極的に享受者へ発信するなど、「情報を利用しやすい方策」を考慮する必要がある。
- ロールモデルがあり、メンターが居る、さらに身近なところにお互いの意識を共有できる場があるかどうか等、物理的な支援にとどまらない「多様な支援体制」を構築することが求められているが、身近なところでネットワークを作るなど、「個々人が自ら踏み込んで行動したいという意識」も十分にある。
- これらの意識を共有し、支援が十分機能するような工夫、相乗効果を生む知恵を出し合う場として、「専門分野の近い参加者が参集する学会企画」は意味がある。

これらを参考に参加者が求める内容を吟味して、今後の学会企画をより魅力的なものへと構築中である。今回の企画が契機となり、本学会に所属する会員の学術活動について、男女共同参画と言う視点から効果的に支援できる環境整備のあり方を模索していきたい。

(文責 本間美和子)

2-5. 開催終了後に頂いたコメント

1) 末岡多美子先生から頂いた(3月5日)メール (抜粋)

ランチョンワークショップの催しは計画をなさった方々のご努力と参加者皆様の熱心さで大成功に終わりました事お祝い申し上げます。日本にも生命科学の分野で生きてゆこうとする優れた若い女性が増えてきた事がよく分り、大変嬉しく思いました。

私が住んでおりますアメリカで感じる事です、女性で一生の仕事としてサイエンスを選ぶ人、また、仕事と家庭を両立させて行こうとする人達に、身近な直ぐ役立つ情報をもっとよく行き渡ったらいいな、ということです。アンケートを読ませていただいても同じ感じを持ちました。仲間同士での情報交換や助け合いや職場の上司や年長者から情報を得ることなど、ちょっとした事でも(例えば、子供が風邪を引いているので保育園にはつれて行けないが、どうしても自分の時間が必要なので短時間安心して子供を預けられる所は何処か、というようなこと)知って居ると随分助かります。職場でのルール(例えば自分のオフィスに子供を連れてくるのは大学のルールに反するのかどうかなど。もしつれてくるのが okay なら学生や研究員に短時間ベビーシットしてもらえます。)も案外知らないものです。私が居りましたコロラド大学では若い女性の助教授を中心とした昼食の集まりがあり、そこで情報を分け合っていました。時々大学上層部の女性も出席して大学の立場の説明をしたり、彼女達の経験者としての意見を披露したので、大変有効な集まりと思いました。

アメリカの女性の社会への進出は20-30年ばかり日本に先駆けて始まりましたので、アメ

Web 版

BMB2007 男女共同参画ランチョンワークショップ開催報告

リカでの活動の歴史を知る事は日本でも何かの役に立つのではないかと思います。少し古くなりましたが、一昨年日本で出版いたしました拙著『波濤を越えて~米国女性科学者の偏見・差別・平等~(医療文化社)』(参考リンク <http://freshu.ist.hokudai.ac.jp/blog/?p=78>)にアメリカでの例が挙げられております。お役に立てば幸いです。御質問ありましたら、下記の email addressにお尋ねください。

末岡多美子 (Tamiko Kano-Sueoka, Ph.D.)

Visiting Scientist

Dept. of Biochemistry

School of Medicine

University of California at Irvine

tsueoka@uci.edu

2) 菅裕明先生から頂いた URL リンク情報及びご著書

切磋琢磨するアメリカの科学者たち

—米国アカデミアと競争的資金の申請・審査の全貌— (共立出版)

「科学者ってなんだ？」梶雅範(編・著)菅裕明(著)他 (丸善)

BTJ ジャーナル連載全 10 回「日米研究者キャリアパス」

<http://biotech.nikkeibp.co.jp/btjin/>

3. その他資料

3-1. ポスター参加機関一覧

(50 音順)

【平成 18 年度科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」採択機関】

- ・お茶の水女子大学
- ・京都大学
- ・熊本大学
- ・東京女子医科大学
- ・東京農工大学
- ・東北大学
- ・奈良女子大学

Web 版

BMB2007 男女共同参画ランチョンワークショップ開催報告

- ・日本女子大学
- ・北海道大学
- ・早稲田大学

参考リンク http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/links.html#model_h18

【平成 19 年度科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」採択機関】

- ・大阪大学
- ・九州大学
- ・神戸大学
- ・独立行政法人産業技術総合研究所
- ・独立行政法人森林総合研究所
- ・千葉大学
- ・東京大学
- ・名古屋大学
- ・広島大学
- ・独立行政法人物質・材料研究機構

参考リンク http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/links.html#model_h19

【その他公私機関】

- ・財団法人味の素奨学会
- ・独立行政法人科学技術振興機構
- ・内藤記念科学振興財団
- ・独立行政法人日本学術振興会
- ・独立行政法人理化学研究所

3-2. 省庁への事前案内状

[PDF版「BMB2007 企画案内送付状」](#)

3-3. アンケート集計データ

[Excel版「BMB2007 アンケート集計結果」\(4シート\)](#)

3-4. 関連リンク

(順不同)

【公的機関】

厚生労働省 行政分野ごとの情報

<http://www-bm.mhlw.go.jp/#categorized>

独立行政法人 科学技術振興機構 男女共同参画ホーム

<http://www.jst.go.jp/gender/index.html>

独立行政法人 国立女性教育会館

<http://www.nwec.jp/>

男女共同参画学協会連絡会

<http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/index.html>

日本学術会議 科学者委員会 男女共同参画分科会

<http://www.scj.go.jp/ja/info/iinkai/danjyo/index.html>

日本学術振興会 特別研究員制度

<http://www.jsps.go.jp/j-pd/index.html>

【その他公私機関】

財団法人 味の素奨学会奨学金制度

<http://www.aji-syogakukai.or.jp/index.html>

公益信託奨学金・研究助成金

http://www.chuomitsui.co.jp/koueki/k_topm.html

資生堂 女性研究者 サイエンスグラント

<http://www.shiseido.co.jp/doctor/>

財団法人 内藤記念科学振興財団

<http://www.naito-f.or.jp/>

日本女性科学者の会

<http://www.sjws.jp/index.html>

ロレアル・ユネスコ女性科学者 日本奨励賞

http://www.nihon-loreal.co.jp/_ja/_jp/index.aspx